



大阪府立北野高等学校図書館

第6号

2016. 2. 19発行

3年生にとって最後の「図書ニュース」になります。まもなく卒業ですね。大学での本格的な勉強の前に、春は自由に本が読める時期です。大学での勉強は厳しいことも多いですが、本当に楽しいです。受験が一段落したら今のうちに人間の幅を広げておきましょう。

そして、1、2年生。よく言われることですが、実は夏休みより春休みの方が長い。あの春はあれをやったなど記憶に残る休みになりますように。

古いものも多く、また哲学系に片寄っていますが、著者の人となりが浮かんでくるような伝記的なものを主に取り上げてみました。君たちの読書の幅を広げる一助となればと思います。

【注 書名の後ろにある(159/M9/1)等の記号は図書館での請求番号です。】

### ①森毅『まちがったっていいじゃないか』創隆社(ちくま学芸文庫)(159/M9/1)

森毅さんは、長らく名物教師として京大で数学(?)を教えておられた北野 58 期の大先輩です。図書館には 60 冊以上の著書があります。どれを読んでも、その独特の世界に触れることができます。紹介した本は中学生に向けて書かれたものですが、手始めに読むのに格好の本です。戦前は北野高校も中学校(旧制)でした。ところどころに北野中学校(旧制)時代の思い出が書かれています。戦前は旧制高校の入試が現在の大学入試、旧制大学の入試は今の大学院の試験のようなものだったといえます。今も昔も変わらない受験の悩みや友人や教師との関係など、今の君たちにも通じるものがあればと思います。読むと元気になるのが、森さんの本のありがたいところです。

何度か駅やバス停で、酸素ボンベをゴロゴロと引きずりながらゆっくりと歩いておられる姿を見かけました。訃報を聞いたのはそのあと間もなくのことでした。近くに一人でお住まいで、私の父と同年、昭和3(1928)年世界恐慌の前年の生まれであることもそのときに知りました。父はずいぶん前に他界し昭和ヒトケタなどという言葉も余り聞かなくなりましたが、「戦中派からのメッセージ」という章もあります。昭和ですら昔である平成生まれの君たちには、戦争はずいぶん遠い存在でしょう。私の父同様に少し世を斜めから見るようなところは世代がなせる技かもしれません。

### ①-1 森毅『数学受験術指南 一生を通じて役に立つ勉強術』中公新書(中公文庫)(410/M21/7)

森毅さんの本をもう一つ。「自他ともに許す非国民少年で、迫害の限りを受けた不良優等生、要領と度胸だけは抜群の受験名人、それに極端に運がよくって、すべての入試をチョロカシてくぐりぬけた。」これが森さんの受験の実際だそうです。素人が真似をすると痛い目にあうという代物です。この本を読んで勉強なんていい加減でいいんだと錯覚した人や、ガリ勉を馬鹿にするようになった人は、この本の神髄をつかんでいません。ちょっと考えればわかるとおり、森さん自身、こと数学については寝食を忘れるほど打ち込んで勉強しています。数学の採点の実際など、参考になる内容ももちろんあります。数学の先生に聞いてみたところ「ちょっと古いかな」とのこと。いずれにしてもこの本を読むことでもたらされる悪影響などというものは、心配するほどでもないのかもしれませんが。私自身は高校時代に、勉強の仕方について友だちと話すことが少なかったのは残念です。学ぶ内容ではなく、学び方というようにメタレベルに立つことも、時に必要なのでしょう。君たちもこの本を手がかりに勉強法について交流して欲しいものです。

## ② プラトン『パイドン』 岩波文庫・新潮文庫 (081/11-9/602-2・131/P1/5)

哲学の古典から。高校時代に「哲学は死の練習である」という考え方にカッコイイと思ったものです。『ソクラテスの弁明』は、ソクラテス自身がなにゆえにアテネの賢人や青年たちと対話を始めたのかという言わば自伝的な内容ですが、『パイドン』は直球勝負です。主人公はソクラテスという設定ながら、そのソクラテスから自立し、自ら語り始めたプラトンの若々しさ(?)を感じる対話編です。プラトンの説くアイデアの世界に触れてみてください。

## ③ デカルト『方法序説』 岩波文庫 (081/11-9/613-1b)

これまた、哲学の古典。文庫本にしてわずか100ページほどです。高校生の頃に読んでみて、なんだ哲学書ってこんなものかと、その深さがわかるのに時間がかかりました。「わたしがいたのはヨーロッパでもっとも有名な学校の一つで、地上のどこかに学識ある人びとがいるとすれば、この学校にこそいるはずだとわたしは思っていました。わたしはそこで他の人が学んでいたことはすべて学びました。しかも、教えられた学問だけでは満足せず、もっとも秘伝的で希有とされている学問を扱った本まで、手に入ったものはすべて読破したのです。」手当たり次第にトンデモ本まで読んだというデカルトですが、そこで得た結論とは何だったのか。学校で教えられていることはすべて不確実だと切って捨てるデカルトでなくとも、自分の人生を一度振り返るのは、次への大きなステップとなります。

### ③-1 谷川多佳子『デカルト『方法序説』を読む』 岩波現代文庫 (080/11-1/86)

デカルトの人生と、その思想がいかに近代という時代をつくったか。現代思想との関連までデカルトの深さを解説してくれます。はまった人は、デカルトの『省察』を本格的に読んでみてください。

## ④ ラッセル『哲学入門』 ちくま学芸文庫 (133/R2/6)

最初に出版されたのは1912年、100年も前の本ですがいまだに色あせない。哲学の入門書と言われたら、これを薦めたい。広く目配りの効いた本です。私生活ではいろいろお騒がせだったラッセルですが、哲学者としては超一流でしょう。ラッセルの哲学をどう評価するかでその人の哲学観が分かるような気がします。ちゃんとものを考えるということがどのようなことか教えてくれます。

### ④-1 三浦俊彦『ラッセルのパラドクス—世界を読み換える哲学』 岩波新書 (133/M2/1)

ラッセルの哲学を正面から扱った数少ない本。現代哲学への入門としてもよい本。

### ④-2 ラッセル『私の哲学の発展』 みすず書房

ラッセルの真面目な伝記です。哲学的内容が中心ですが、ラッセルの初恋、ウィトゲンシュタインとの出会いなど、読み物としても楽しめます。

### ④-3 ノーマン・マルコム『ウィトゲンシュタイン—天才哲学者の思い出』 平凡社ライブラリー — (講談社現代新書) (近日中に図書館へ)

大学時代、学校から帰る電車の中で立ったまま一気に読んでしまった記憶があります。弟子の書いた回想なので少しは割り引いて読まなければなりません、変わり者とされることの多いウィトゲンシュタインの生き生きした姿が描かれています。

⑤ W. K. ハイゼンベルク『部分と全体—私の生涯の偉大な出会いと対話』みすず書房(420/H4/3)

自然科学に興味を持つ人も、有名な学者の伝記を読んでも視野が広がります。理系の人はもちろん、文系の人にも薦めたい。大学では「教室の外で学べ」などと言われたものです。自分で考えてみるのももちろんだが、教室の外の廊下や居酒屋、さらには先生の自宅に押しかけて、先生方から直接薫陶を受ける。何気ない会話の中に学ぶことが多かったように思います。量子力学の黎明期、パウリやボーア、さらにアインシュタインなど、伝説上の人物とってよい学者たちの交流の記録はそれだけでも、わくわくさせられます。さらに、プラトン哲学の影響、宗教や音楽、ナチズムとの対峙など、ずっしりと中身の詰まった読み応えのある本です。

⑤-1 R. P. ファインマン『ご冗談でしょう、ファインマンさん(I・II)』岩波書店(岩波現代文庫)(420/F8/2-1, 2-2)

もう少し軽い読み物として、ファインマン教授に登場願ひましょう。20世紀を代表する物理学者でノーベル賞も受賞しているとのことですが、天性のしゃれっ気といたずら、いつまでも子どものような好奇心と科学への情熱のかたまりのような人物です。1ページに1カ所はニヤッとさせられます。とにかく、おもしろい。君たちの中に、これに感化(?)されて、アメリカの大学や大学院で学ぶ人が出てくることを期待します。

⑤-2 コンラート・ローレンツ『ソロモンの指環 動物行動学入門』早川書房(481/R1/1)

1949年に発表されて以来、各国で読み継がれている名著。動物行動学とはいかなる学問かなどと考える前に、登場する動物たちの姿に心が温められます。それをほめるとあらゆる動物と会話ができる、ソロモン王が持っていたという指輪が題名の由来です。コクマルガラスのけなげな行動は、恋の悩みにも効くかもしれません。とっても読みやすいです。

⑥ 木田元『わたしの哲学入門』講談社学術文庫(104/K6/4)

「人がどんなふうにして哲学に近づいてゆくものか、その一例として私自身のばあいを語ってみようと思う。」そのように、自分の人生と哲学を重ねながら解き明かす本です。木田元さんが亡くなったのが2014年の夏でしたから、もう1年半が経ちます。今の1年生が中学校3年生の夏、北野高校を目指して(?)勉強していた頃です。私が木田さんの本を読み始めたのはそれからでした。「中学・高校・大学をすんなり進学して哲学の勉強をはじめたわけではない。かなりの廻り道をして、考えに考えたあげく東北大学の哲学科に入ったのである。その前は、山形県の農林専門学校に入り、農業の勉強などさっぱりしないで、なかば無頼の生活を送る一方で小説ばかり読みあさる、すこぶる悪質な生徒だった。それがあつ動機から、先ほどふれた<存在とはなにか>などという途方もないことを問うハイデガーの哲学に強く心を惹かれ、この人の本をちゃんと読んでみたいと思う一心で大学の哲学科に入ったのである。」父親がシベリアに抑留され、母と姉弟の4人とともに満州から引き上げ、18歳になったばかりの木田少年は家族を支えて働くことになる。そのなかで、「なんとしても『存在と時間』を読まずにはすまされない気持ちになってきた。」ということです。奇しくも木田さんも、昭和3(1928)年のお生まれです。恥ずかしながら、ハイデガーについて、少し勉強しなければと思ひ始めたのは木田さんの本を読んでからです。大学時代は、ハイデガーと言えば、術学趣味で人を煙にまくような哲学者として敬遠していました。幾つになっても発見はあるものです。君たちが将来について迷うとき、その人の人生を語るような本には、なにがしかの発見があるものです。木田さんの本はそのような発見と勇気を、そうして、学問の厳しさと楽しさも教えてくれます。

⑥-1 木田元『闇屋になりそこねた哲学者』ちくま学芸文庫(104/K6/2)

木田元さんの人生を詳しく知りたい人はこの本を。「闇屋」というのは、木田さんが18歳で家族を支えなければならなかったとき、手に染めた仕事です。そこでもなかなかの手腕を発揮するのだが、哲学への道を歩み学者として生きてゆく過程を描いています。

⑥-2 木田元『反哲学史』新潮文庫(130/K6/1)

木田さんの人生でなく哲学を知りたいという人は、この本から入るといい。「反哲学」とは何かを論じるより、まずは哲学史を「反哲学」で再構成しようというものです。

⑦ ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』光文社(亀山郁夫訳)・岩波(米川正夫訳)・新潮(原卓也訳)の各文庫など(983/D1/4-1~5・081/I1-3/51-1~4・983/D1/6-1~3)など

木田元さんは、ドストエフスキーを読んだかどうかでその人の人間や人生に対する構えが変わるといっています。ドストエフスキーを読むには体力がいります。高校時代の長い休みに何日か延々と読み続けた記憶があります。体力のあるうちに、時間のあるうちにチャレンジしてみてください。

⑦-1 亀山郁夫『新カラマーゾフの兄弟(上・下)』河出書房新社(913/K115/1-1, 1-2)

なんと、カラマーゾフの兄弟が現代日本によみがえります。上下合わせて1400ページ。多少の違和感を抱きつつも、その世界に没入してしまえば読み切ってしまう。

⑧ カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』早川書房(933/I2/3)

同じく日本に舞台設定を変え、今テレビで放映中のドラマの原作です。カズオ・イシグロさんは長崎生まれですが、5歳でイギリスに移住。10歳くらいが言語定着の境目だそうで、日本語はほとんど使えないということです。イシグロはイギリス人以上にイギリス的だとされます。原作のヘールシャムという学校は、イギリスのパブリックスクールを彷彿とさせます。イギリスの田園地方の中に点々と存在する全寮制の学校。かつてのマナーハウスで、玄関ホールにオックスブリッジ入学生の名前の一覧が掲げられていたりする。そのような想像力をかき立てます。ネタバレになると台無しなので、ドラマを見ていない人は、原作を是非。ノブレス・オブリージュというにはあまりに切ない。学問ないしそれ以上に芸術の持つ意味も考えさせてくれます。

⑧-1 カズオ・イシグロ『日の名残り』中央公論新社(933/I2/2)

あるイギリス貴族の館に身を捧げる執事の物語です。その貴族と浮沈を共にする執事の人生が描かれています。大英帝国の姿とも重なり、大戦間の歴史に興味のある人も一読を。

⑨ 福沢諭吉『福翁自伝 新訂』岩波文庫(081/I1-9/102-2)

最後の1冊は古典的な自伝です。勉強が嫌になったら一読をお勧め。幕末の若者はかくも痛快に勉強していたのだと、感心しきり。半端じゃないほど勉強しています。そうして、暴れ回ります。大分の中津藩の蔵屋敷があった大坂で生まれた諭吉は、関西人のノリです。ある大学は、新入生全員にこの本を配布するとか。このことの真偽のほどは別として、若いうちに読んで欲しい本です。明治元年には諭吉は30代半ば、江戸時代にすでに3度の渡米欧。諭吉が光り輝いていたのは、他の幾万の若者と同様、やはり幕末の頃だったのかもしれない。この本を読んでから適塾を訪れ、彼らが寝起きしていた二階の大部屋などを見学すると、よし自分もという気になれます。

とりとめのない雑多な本の紹介になりましたが、新しいステップへ入るこの春、よき友、よき師、そしてよき書との出会いがあることを祈っています。